

H29 年度 I 期 グループ企画 1

	氏名	渡航先	国・地域	渡航先機関での 受入期間
1	T. A	University of Malaya	マレーシア	H29/8/13-H29/8/17
2	S. Y			
3	S. K			

平成 29 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 4 年 T. A

目的

マレーシアの University of Malaya(マラヤ大学)で行われる 15th imspq への参加、マラヤ大学病院の見学

内容・成果

imspq とは、inter-medical school physiology quiz の略で、今年度は 15 回目で世界約 100 大学が参加しました。私たち大阪大学チームは、今年 4 月に大阪医科大学で行われました医学生生理学クイズ日本大会 2017 で優勝することができ、出席されていた imspq の主催者である Prof. Cheng Hwee Ming がマレーシアのマラヤ大学で行われる 15th imspq への出場を薦めてくださったことから、出場を決意しました。また、Prof. Cheng Hwee Ming のご厚意により、マラヤ大学病院の見学も手配してくださったことから、2 日間の外科の見学（1 日目ヘルニア手術の見学、2 日目 pediatric surgery, breast cancer の見学）も実現しました。

15th imspq は、1 日目が written test で約 100 チームから 48 チームに絞られ、2 日目は壇上に上がってのクイズ大会で、first round で 48 チームから 16 チーム、quarter finals は 16 チームから 6 チームへ、そしてさらに semi-final で 6 チームから 3 チーム、そして最後の final という流れでした（first round と quarter finals は英語で読み上げられた問題に対してフリップに答えを書く形式、semi-final と final は口頭で説明する形式でした）。大阪大学チームは、written test は通過することができましたが、その次の first round で敗退してしまいました。Written test は 100 問 75 分の true or false test で、間違った答えでは negative mark（減点）という厳しい条件で、なんとなく理解しているだけでは正解できず、ごまかしの利かない本当に生理学の知識を問うような問題でした。次の日は、6 チームずつ壇上に上がって、問題が英語で読まれたのち 20 秒以内に答えを書くというもので、一人につき 3 問でした。ここで 3 分の 1 の 16 チームに絞られ、残念ながら大阪大学チームはここで敗退してしまいましたが、壇上に上がって緊張する中、短時間で英語で取り組むということに挑戦できたことは本当に有意義でした。その後は見学することになりましたが、特に semifinal, final では、難しい問題を英語で説明する他国のチームの姿を見て、知識の豊富さと英語力の素晴らしさにただただ驚きでした。英語も母国語のように流暢であり、解答も素晴らしく、勉強量の豊富さには本当に尊敬の念を抱きました。今の自分には、そのように流暢に解答する実力はないので、もっともっと英語力の向上と、知識の向上を図

らなければならないと痛感しました。そのためには、何か教科書を一冊決めて（英語の、生理学の成書）それを隅々まで読んで仕組みを理解し、しかも自分で理解した生理学の理論をクイズ中に適応する能力が必要だと考えました。私はこの大会に向けて、統合生理学の岡村康司教授・Adisorn 先生が勉強会を主催してくださり各テーマについて要約したのち、Prof. Cheng Hwee Ming の著書である問題集に取り組んだり、医学英語のカルビ先生のもとで英語で説明する対策に取り組む、また個人では複数の生理学の問題集を使って英語の問題になれながら生理学の対策を行ってきました。これらのことは、本当に私にとって役に立ち、生理学についてより深く理解することができただけでなく、英語の訓練になり、さらに4年生の臨床の授業においても大いに理解の助けとなりました。反省点としては、結局英語の生理学の成書を1冊完全に読み切ることができなかつたことです。わからない点を調べるのに用いましたが、1冊通して読むという時間はありませんでした。また、大会が初めてということも有り、どのような問題が出されるかということもほとんどわからないまま臨んだということも有るので、もし次にチャンスがあるならば、もう少しうまく対策できるのではないかと思います。しかし、大阪大学チームは出場が初めてでありながら2日目に進出することができたこと（2日目に進出することができたのは日本としても初めてだそうです）、また1回でも壇上に上がることができたことは本当に有意義な経験となり、日本チームとしても第一歩を進むことができたのではないかと思います。また、世界の学生がどのような勉強をしているのかということも垣間見ることができ、自分も同じように努力し続けたいといけなくて強く感じたため、これから一生懸命医学、そして語学の学習に励みたいと決心しました。また、空いた時間には他の日本チームの学生と交流することができたり、また海外のチームの人ともお話しできたりして、少しでも色々な国の医学・文化について知ることができそのことも有意義でした。また、最終日18日には、特別講義として Prof. Walter F. Boron の授業を聴講することができました。”Cross-Organ Principles in Physiology”というタイトルで、生理学では色々な臓器について学びますが、生理学全体に共通して存在する法則について学びました。私は普段は、分野・臓器ごと（循環器、呼吸器、腎臓、内分泌など…）でそれぞれ勉強することがほとんどですが、今回は分野横断的に話を聞くことができ、今までの知識がさらに強固に結びついたので、非常に有意義でした。このように、クイズ以外にも貴重な機会がある本当に素晴らしい大会なので、是非来年も大阪大学から出場してほしいと思います。私たちが現地で学んだことは伝えることができると思うので、是非私たちよりもさらに次の stage まで進んでほしいと思います。

マラヤ大学病院の見学においては、一日目はヘルニア手術の見学、二日目は **pediatric surgery**、**breast cancer** の見学をさせて頂きました。私たちは日本でまだ臨床実習を行っていないということで、わからない点も多くありましたが、現地の先生や学生が色々説明してくださいましたし、私たちが質問をすれば丁寧に教えてくださいました。ヘルニアの手術では、腹腔鏡を用いており、マレーシアでも腹腔鏡手術は傷の少ない手術として、多く

行われているそうです。その後、カンファレンスに参加させていただいたのですが、ディスカッションでの英語を理解するのが非常に難しく感じました。理由の一つには、やはり医療英語の不足が挙げられると思いました。また、先生や学生さんが直接私たちに説明してくださるときは理解しやすいのですが、ディスカッションでは先生方同士かなりのスピードでお話しされているので難しいのだと思いました。**Pediatric surgery** では、NICUの見学・手術の見学などをさせて頂きました。また、マラヤ大学病院では患者さんの画像データなどをパソコンで管理していましたが、マレーシアのすべての病院でそうというわけではなく、紙データで管理しているところもまだ存在するそうです。パソコンより紙データの方が良い、という意見もありました。病棟は訪れたときはあまり混雑しておらず驚きましたが、**pediatric surgery** なので、直接患者さんが訪れるわけではないからだそうです。**Breast cancer** では、診察室を見せて頂きました。印象に残ったのは、診察中の医師・看護師共に白衣を着ている方がいらっしやらなかったことです。時間があれば、マレーシアの医療制度についてなど色々とお聞きしたかったのですが、今回は日程の都合上から2日間ということで、あまりお聞きできなかつたことが残念です。

今後の抱負

今回多くの海外の学生に出会うことができましたが、みな英語が非常に上手でした。大会の決勝にて受け答えする英語が流暢であつただけではなく、大会には多くのボランティアの学生がいたのですが、どの学生に声をかけてもみな英語が上手な方ばかりでした。また、前述のように本当に多くの知識量を持つ世界からの医学生と触れ合うことができ、本当に自分も一生懸命勉強しなければならないということを痛感しました。これからはできる限り英語を用いながら医学を勉強し、また言葉だけではなく本当にしっかりと勉強しなければならないと実感しました。そしてまた将来、今回戦つた素晴らしい仲間と仕事などで再会できればうれしいです。また、海外の学生は、日本語や日本文化について詳しく知ってくれていたのに、私は他の国の文化について詳しく知らなかつたので恥ずかしさを感じたとともに、さらに多くの国について知りたいとも思いました。

また、私は5年生の選択実習で必ず海外実習をしたいと思っているので、それまでにはさらに英語力を向上して臨みたいと思います。また、勿論英語力もそうですが、それ以上に海外で実習するためにはその分野について深く理解していないと、学べる量が減つてしまうと思うので、一生懸命普段から勉強しなければならないと思います。

謝辞

このマレーシアの渡航で、本当に多くのことを学び、そこで得たすべての経験が今後の糧になると思います。このような機会を支援してくださいました岸本忠三先生、また大会

の準備のために大いに協力して下さった統合生理学教室の岡村康司教授、Adisorn 先生、英語で説明する練習を指導して下さったカルビ先生、そしてこの渡航に関わって下さったすべての方に大いに感謝申し上げます。また、このような大会を主催して下さった Prof. Cheng Hwee Ming, 病院見学でお世話になったすべての方にも感謝申し上げます。

スケジュール

8月12日	日本出発 マレーシア クアラルンプール到着
8月14日	マラヤ大学病院 (ヘルニア手術の見学)
8月15日	マラヤ大学病院 (pediatric surgery, breast cancer の見学)
8月16日	15 th imspq 1 日目 written test
8月17日	15 th imspq 2 日目
8月18日午前	クイズ大会の一環として Prof. Boron の特別講義の聴講
8月18日晚	クアラルンプール出発
8月19日朝	日本帰国

岸本奨学金 実施報告書(内容報告) 2017 年 9 月 21 日

氏名 S. Y

留学先大学名 マラヤ大学

渡航期間 8月3日ー 9月2日

1. 活動の目的

2016年に大阪医科大学で行われた日本の生理学クイズにおきまして大阪大学チームが優勝したために、第15回国際生理学クイズ大会 Inter-Medical School Physiology Quiz (IMSPQ)に参加しようとIMSPQを始められた Cheng Hwee Ming 教授に勧めていただきました。それで、チームメンバー5人のうち3人が参加することになりました。また、この機会を利用してマレーシアの Malaya 大学を見学しマレーシアにおける医学の状況医療の進歩を学びたいと考えております。

2. 活動の内容

14-15日の2日間は Malaya 大学では様々な手術、具体的には両側ヘルニアの内視鏡手術と幼児の手術、新生児や小児病棟を見学させていただきました。さらに、乳がんとマラヤ大学病院におけるテクニックや倫理問題に対するコンファレンスも参加させていただきました。

16-17日は3人のチームとして第15回目国際医学生生理学クイズ大会 Inter-Medical School Physiology Quiz (IMSPQ)に参加いたしました。16日が個別の一次筆記試験であり、問題は100問あって True か False を回答し間違ったらマイナスになるという形式でした。17日はチームの代表者3人が出て一人あたり3問ずつを回答しました。問題は先生が2回英語で読み上げて、その後数十以内に回答をホワイトボードに書かなければなりませんでした。

18日に 生理学教科書の著者である Walter F.Boron 教授のレクチュアに参加しました。

3. 活動の成果

2 日間は短かったが、病院の見学ではマレーシアにおける病気そして行われている医療また医療の進歩や変化など、院内の問題の対策等が学べました。

そして、国際医学生生理学クイズ大会では 16 日が個別の筆記試験でありチームの平均点が上から 48 位になれば翌日のクイズへ参加できるという形式でした。我々大阪大学チームは 38 位となり 17 日の大会に参加することができました。クイズにおきまして全員 3 問のうち 1 問ずつ回答できましたが、残念なことに次の対戦へは突破できませんでした。

4. 今後の抱負

Malaya 大学病院を見学した時に日本のような先進国とタイやマレーシアのような発展途上国の医療の状況を比較でき、医者さんの数や医療の設備のこと、システムや法律の違いがわかりました。

今回の大会に関しまして一次筆記試験を通れましたが、問題の内容にはまだ勉強不足のところが多かったと感じております。正解できなかったのは、知らないところのほかに限られた時間以内にすぐ回答しなければなりませんでしたので緊張感もありました。問題自身は面白く良い問題であり、将来の医者をする上で多少役たつと思いますので、また不明な部分はあらためて勉強したいと思っております。次の対戦へは突破できなかったことは残念なことでしたが、大変貴重な経験でした。参加するためにチームメンバーとの勉強や努力、大会の間の面白さ、いろいろな国の人々と出会えること、世界の有名な先生レクチュアに参加できること、この全ては一生に忘れられない思い出でした。今後、もしほかの大会やイベントがあればまた積極的に参加していくつもりです。

最後にこの貴重な機会を与えてくださった岸本忠三先生をはじめ、スタッフの方々、医学科教育センター、医学科国際交流センターの先生方等には心から感謝を申し上げます。

平成 29 年度岸本国際交流奨学金による海外活動報告書

医学部医学科 3年次 S. K
グループ名：国際生理学クイズ

【スケジュール】

日付	内容
2017年8月13日	大阪 関西国際空港発 マレーシア クアラルンプール国際空港着
2017年8月14日	マラヤ大学にて登録 マラヤ大学病院 外科の手術室にて腹腔鏡手術見学 マラヤ大学病院 外科のカンファレンスに参加
2017年8月15日	マラヤ大学病院 小児科にて病棟や PICU の見学 マラヤ大学病院 小児外科の手術室にて手術見学 マラヤ大学病院 腫瘍部門のカンファレンスに参加 マラヤ大学病院 乳腺外科にて外来診察や施設の見学 マラヤ大学医学部生理学教室の Cheng Hwee Ming 教授と面会
2017年8月16日	マラヤ大学 15 th IMSPQ(Inter-Medical School Physiology Quiz) 2017 開会 IMSPQ Written Test 出場 IMSPQ Quiz Concert
2017年8月17日	マラヤ大学 IMSPQ First Round 出場 IMSPQ Quarter-finals 見学 IMSPQ Semi-finals 見学 IMSPQ Finals 見学 マラヤ大学病院の施設見学(薬剤部、薬局等)
2017年8月18日	マラヤ大学にて Cheng 教授らと面会 マレーシア クアラルンプール国際空港発
2017年8月19日	大阪 関西国際空港着

【目的】

IMSPQ(Inter-Medical School Physiology Quiz)への出場を通して、世界中の医学部生との交流を図るとともに生理学や英語の知識を深めること目的としました。

また、マラヤ大学病院見学(主に Department of Surgery)を通して、マレーシアと日本の大学病院における医療の違いを学ぶことを目的としました。

【内容】

◆マラヤ大学病院

- ・ 外科の手術室にて腹腔鏡手術見学
- ・ 外科のカンファレンスに参加
- ・ 小児科にて病棟や PICU の見学
- ・ 小児外科の手術室にて手術見学
- ・ 腫瘍部門のカンファレンスに参加
- ・ 乳腺外科にて外来診察や施設の見学
- ・ 施設見学(薬剤部、薬局等)

◆マラヤ大学

- ・ 15th IMSPQ(Inter-Medical School Physiology Quiz) Written Test 出場
- ・ IMSPQ Quiz Concert
- ・ IMSPQ First Round 出場
- ・ IMSPQ Quarter-finals 見学
- ・ IMSPQ Semi-finals 見学
- ・ IMSPQ Finals 見学

【成果】

2017年8月14日(火)

午前から午後にかけて、マラヤ大学病院の外科(Department of Surgery)の手術室において単径ヘルニア患者(成人男性)の腹腔鏡手術を見学しました。患者に投与される抗菌薬や麻酔薬は日本でも使用されている薬剤でした。麻酔科医の医師が麻酔をかけ、外科医が手術を執刀するというスタイルも日本と変わりませんでした。腹腔内にエアを入れて見やすくし、メッシュを用いて穴を塞ぐという作業について腹腔鏡を用いて行っていました。手術時間は2時間程度であり、同様の術式では日本に比べるとやや時間が長くなるようでした。

その後、死亡症例に関する外科カンファレンスに参加しました。さまざまな分野の外科医が参加し活発に議論がなされていました。

2017年8月15日(水)

午前中、マラヤ大学病院の小児科の病棟や PICU(Pediatric Intensive Care Unit ; 小児集中治療室)を見学しました。病棟や PICU の回診時に医師たちは白衣を着用せず私服に近い服装で、非常に親しみやすく、患者さんやご家族に安心感を与える雰囲気でした。PICU では、横隔膜ヘルニア、先天性嚢胞状腺腫様奇形(CCAM)、短腸症、心室中隔欠損症の症例、病棟ではリンパ管異形成の症例の患者さんを見学させていただきました。マレーシアの小児外科で最も多い症例はヘルニアであると医師からお話を伺いました。

その後、小児外科の手術室で直腸閉鎖症の術後のストーマ閉鎖手術を見学しました。

午後から腫瘍部門のカンファレンスに参加しました。その後、乳腺外科にて外来診察や施設を見学しました。ここでも医師たちは白衣を着用せず私服に近い服装で、非常に親しみやすく、患者さんやご家族に安心感を与える雰囲気でした。乳がんの術前化学療法中の患者さんなど複数の症例を見学させていただきました。乳がん患者の生活や心のサポートをするための部屋もあり、生活面や心理面のサポートも充実している様子でした。

お忙しい中、私たちグループの指導にあたってくださったマラヤ大学の医師やスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。

マラヤ大学医学部生理学教室の Cheng Hwee Ming 教授と面会し、IMSPQ(Inter-Medical School Physiology Quiz)の概要や詳細について説明をしていただきました。

2017年8月16日(水)

15th IMSPQ (Inter-Medical School Physiology Quiz)に出場しました。

Written test では、生理学に関する正誤問題が英語で合計 100 題出題されました。問題は 20 ブロックに分けられ、各ブロックで 5 題出題されました。各問題に正解すると 1 点、無回答は 0 点、不正解は-1 点となり、各ブロックの最高点数は 5 点、最低点数は 0 点(マイナスにはならない)でした。神経、循環器、呼吸器、消化器、腎泌尿器、内分泌、運動器など幅広く問題が出題されました。マレーシア、スーダン、インド、中国、バングラディッシュ、インドネシア、ネパール、イラン、オーストラリア、タイ、フィリピン、カンボジア、日本、モンゴル、シンガポール、台湾、ベトナム、イギリス、スリランカ、ラオス、ミャンマー、クロアチアから参加チームは合計 100 チーム以上集まり、そのうち Written Test 上位 48 チームが First Round に進出します。日本からは大阪大学、大阪医科大学、自治医科大学、慈恵医科大学のチームが参戦しました。

Quiz Concert では、マラヤ大学の Cheng 教授による Written test の結果発表と各国の代表チームによる出し物が催されました。結果発表にて、我々大阪大学チームは Written Test を通過し First Round に進出することが決まりました。日本の大学で IMSPQ の Written Test を通過したのは我々大阪大学チームが歴代初めてということで、日本の大学として新たな一歩を踏み出すことができました。

出し物ではスリランカ、ミャンマー、インドネシア、タイ、フィリピン、中国、カンボ

ジア、モンゴル、ベトナム、ラオス、ネパール、日本、マレーシアなどの国々の代表チームが歌謡、舞踊、国や文化の紹介、演劇、クイズなどの出し物を催してくれました。主にアジア各国の多くの文化に触れることができ、幅広い視野や教養を養うことができました。

2017年8月17日(木)

First Round は出題者が英語で読み上げる生理学の問題について、手元のホワイトボードに回答を書くという形式で行われました。問題は合計 9 題出題され、各グループ 1 人 3 問ずつ回答するという形式でした。48 チームが 8 つのグループ(Group1-1~1-8)に分けられ、各グループの最高成績チーム 8 チームとそれ以外で高得点の 8 チームの合計 16 チームが **Quarter-finals** に進出します。

我々大阪大学のチームは Group1-4 でした。Group1-4 は、日本の Osaka University (OU)、タイの Chulabhorn International College of Medicine, Thammasat University (CICM)、台湾の Tzu Chi University (TCU)、中国の Anhui Medical University (AMU)、インドネシアの Universitas Indonesia (UI)、スリランカの University of Kelaniya (UK) の 6 チームでした。我々大阪大学のチームは 9 問中 3 問正解で、6 チーム中 4 位タイでした。残念ながら **Quarter-finals** に進出することはできませんでした。Group1-4 ではスリランカの University of Kelaniya (UK) が 1 位でした。

その後、**Quarter-finals**、**Semi-finals**、**Finals** を見学しました。大変レベルの高い戦いが繰り広げられ、最終結果はスリランカの University of Colombo (UC) が優勝、中国の Xuzhou Medical University (XZMU) が準優勝、スリランカの University of Sri Jayewardenepura (USJP) が 3 位でした。

今回の大会を通して、生理学や英語の知識を深めるとともに、世界中の医学部生(特にタイ、中国、マレーシアの医学部生)と交流することができ大変良い刺激となりました。また、幅広い視野を持った日本の他大学の医学部生や先生方、日本人ながらチェコの大学で医学を学んでいる医学部生とも交流することができ、多くのことを学ばせていただくことができました。

大会の空き時間にマラヤ大学病院の薬剤部、薬局などを見学しました。薬剤師は白衣ではなく私服に近い服装で、非常に親しみやすく、患者さんに安心感を与える雰囲気でした。

2017年8月18日(金)

マラヤ大学医学部生理学教室の Cheng Hwee Ming 教授らと面会し、挨拶や記念撮影(集合写真撮影)に参加しました。

【今後の抱負】

今回のマラヤ大学病院見学や 15th IMSPQ を通して、さまざまな医療や言語・文化に触れ、幅広い視野を養うことができました。その中で私自身の今後克服すべき課題であると感じたのは英語で外国人とコミュニケーションを取ったり情報を交換したりすることです。将来、海外の学会や研修などに参加する際、まず、「英会話」が私の乗り越えるべき課題の第一歩であると感じました。継続的の英語を学ぶとともに生理学およびその他の医学分野の学問や医学分野以外の分野の学問について学び、世界から情報を取り入れ、世界に情報を発信できる医師になるために精進していく所存です。

最後になりましたが、本奨学金にて経済的支援をしてくださった岸本忠三先生、岸本国際交流奨学金関係者の皆様、日本での勉強会において指導してくださった統合生理学教室の岡村康司先生、Adisorn Ratanayotha さん、医学系研究科の Kalubi Bukasa 先生、分子生体情報学研究室の田村敦先生をはじめ多くの方々の支えがあって、私たちのグループは今回このような貴重な経験をさせていただくことができました。深く感謝を申し上げます。